早生の稲穂が色づきかけりゃ
今年の案山子をどうしようと
クラス討議の幕があく

夢は膨らみ溜って溢れ
奇策、珍案　妙手のラッシュ
教師冥利の泣き笑い

ああでもないと　こちらの雀
こうでもないと　鳥はわめく
瞳を燃やす子らの力で
案山子の生命と姿ができる

へのへのもへじは気に入らぬ
道化の動きに手がこむ苦心
竹の小道具　新兵器
ほんとに　今の案山子は忙しい

さてさて　黙っておられるが
とりまく子等と何を語り
何処を視つめて耳を傾け
何を思って　ござるかな

昭和55年12月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会

（わたしたちのかかし、いいでしょう　一美合小）

—教育随想—

自分で選んだ苦難の道

木俣達彦

プロの道は入った者でなければわからない苦しさがあると聞かされてきたし、現在もその中で悩み悶え苦しんでいる身であるが、振り返ってみると私の三十六年間の人生で、最もつらく苦しかったのは中京高校時代の三年間であった。

高校一年の時、百五十人も入部した野球部員が、三年の時には一ケタになっていたし、十名ぐらいいた野球の特待生ですら三名になっていたことでも察してもらえると思う。（私は特待生ではなかった）片道二時間以上かかる通学、一日の授業を終えてから四時間—土曜日は六時間—もの猛練習、土曜日も日曜日も夏冬の休みもなく、朝六時半に家を出て帰宅は夜十時ごろ、空腹と疲労で東岡崎駅から伊賀の家までが実に遠かった。

私も何度野球をやめようと思ったことか。その度に私の弱い心を鞭うち、現在まで野球と離別することなくこれたものは何ゆえであっただろうか。

産婆さんから成育を危ぶまれたほどの未熟児で生まれた私は、幼少時代特に体が弱かったので、両親は私に遊びや運動をすすめ、少しぐらい危険が伴うようなことであろうと、無理なことであろうと一度も止めたことはなかった。

四才の時父が自転車を買ってくれた。その日のうちに乗れるようになり、以来毎日あちらこちらを走り回ったが残念なことにブレーキをかけることができず、止まる時は転ぶかぶつかるしか方法がなかった。川へ落ちたり堤防をころげたり塀や家にぶつかったりした。

また、木に登ったり田畑を走り回ったり川で泳いだりして、年中衣服を汚し、なま傷が絶えなかったが、両親はいつも笑顔でじっと見つめていてくれた。

葵中学校三年生の時、私がどの高校を受験するかについては、それまで十五年間、私の言動についてほとんど自由にしてくれ、すべて意見が一致していた父と母との気持ちが異なっていた。父は、岡崎高校をすすめてくれた担任の先生の意見に賛成のようであった。野球部の先生は野球をするなら名古屋のほうがと言われたが、母は遠くの私立へ行くよりすぐ近くの県立岡崎北高校を願っていたようだった。先輩は異口同音に、名古屋の高校で野球をしていくには、肉体的にも精神的にもさまざまな苦労や誘惑があり、三年間続けることはむずかしいと話してくれた。

私は周囲の皆が当然受験するだろうと思っていた県立岡崎高校より、最も苦しいといわれた遠い私立の中京高校を自分で選んで進学した。

高校進学率95％、大学進学率30％の多きに達している現在、大学受験まで教育ママが決めたり付き添っていくといわれている。私は、少年時代、自ら選んだ苦難への決意が、高校・大学からプロでは高年令といわれる現在まで、野球を貫き通した人生を歩み続けることができた原因であると信じている。

（中日ドラゴンズ選手）

国境あれこれ

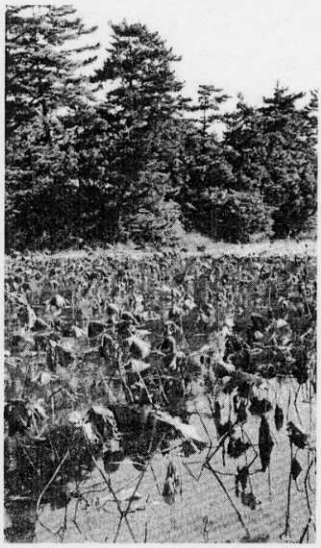
柴田昭子

あこがれのヨーロッパへ飛行機に乗ること十八時間余り、途中、給油のためにモスクワ空港に寄った。真夜中にもかかわらず厳しいボディーチェックと手荷物検査をされて、外国に来たんだなあと実感した。

最初の訪問地東ベルリンから次の西ベルリンの国境のチェックは特に厳しかった。バスから全員降ろされ、一列に並び検査された。係員は一口もしゃべらず一人一人パスポートの写真と見比べた。ガイドから、「絶対に写真を撮らないで下さい。撃たれますから。」と言われ緊張の一時間であった。国境を越えることは大変なことだとつくづく思った。

次はスイスへの旅だった。国境で緊張してパスポートを出したらチラッと見ただけで隣りの係員としゃべりながら入国の印さえ押されなかった。「もっとしっかり見てよ。」と言いたくなる程だった。

次はフランスであった。バスで入る国境はもっと簡単で、まるで日本のインター



—ふるさとの山河—

池—今昔

南中学校区の地形を見ると、まず第一に気づくのは二十と四十メートルの等高線の間に池の多いことである。二十年ほど前は大小併せて十八か所もあったが、現在では九つしか残っていない。

羽根町の東端に鰻池という地名がある。そこにはこんな伝説が残っている。

ある年、長い日照りが続き田は干上がり亀裂を生じた。村人は穀物が実らず毎日雨乞いをし続けた。

そんな時、どこから来たのかみすぼらしい僧が人々に、東へ行くと水のある池があることを教えてくれた。村人は早速その池から田に水を引こうと出掛けたのである。水をたたえた池を見て喜んだ村人は、直ちに水路工事を始めた。すると池の岸から突然一匹の大鰻が現われた。驚いた村人達は持っていた鍬、鎌、棒切れ等で鰻を滅多打ちにし生け捕った。

その時、水面に池の神様が現われ「長年この鰻に多くの魚が悩まされ困っていた。捕えてくれたお礼に何か差し上げたい。」と言う。そこで村人達は、「ただ雨さえ降らしていただけたら。」と哀願した。神様がその願いを聞き入れると同時に、満天の一角よりにわかに黒雲が立ち込め、やがて大粒の雨が降り出した。雨が止むと池の渕に白い石が一つ残されていたので、人々はそれを雨乞石として村の稲荷神社に祭った。それ以後、再度の干ばつを恐れ、村々では灌漑の溜池造りに励みその第一号が羽根大池である。こうして長池（鰻池）と羽根大池は羽根町の水田数町歩を潤すことになった。

また南部の柱町には五つあった池が、今では大池、庄司池、明治池しか残っていない。通称東楽園の池と呼ばれているこれらの池については、既に本紙九月号で紹介されているため、ここでは省くことにする。

学区の北部、南中から小豆坂に至る道沿いに七ツ池と呼ばれる池がある。池の周囲は小高い山で雑木林が続いており、昼間でもほとんど人の通らない所であったが、都市化の波がここにも押し寄せ、池まで埋め尽し、すっかり宅地化している。そのため今では雨池、中池、ガン渕五番池の四つが残っているのみである。

この池の水は、戸崎町の水田十数町歩を潤していたが、今はその水田すら見られない。昭和二十五年頃まで、雨池の水門脇の水車小屋に八台の米つき機が設けられ、コットンコットン杵の懐しい音が聞こえていたことを想い出す。

水、それは古今を問わず、我々の生活にこれほど大きな影響を与えるものはないであろう。これらの池は人間が水との苦闘に打ち勝ってきた長い歴史を秘め、今もなお澄みきった色を映し、人々に語りかけているのだが……。

（南中　川路　和夫）

チェンジと同じであり、これにはまたびっくりした。

国情の差をつくづく感じさせられた旅であった。

（梅園小）

「マイ　グランドファーザー　イズ　インドネシアン」

岩月　健

ジャカルタは酷暑の中であった。一日五百ルピア（約百八十円）で食うことのできる国は、それだけ貧しさが目についた。

ホテルのロビーには、観光客相手にジャワ更紗を売っている工芸家がいた。部屋の飾りとしては仲々洒落ていると思いながら見ていると、「オマエは、インドネシア人か？」と、声をかけられた。「とんでもない、日本人だ。」と言うと、「オマエならインドネシア人で十分通用する。」と、変な折り紙をつけられてしまった。

以来、目が合うと、ニッコリ笑って挨拶をしてくれるものだから、同宿者と作品を買うことにした。

買う作品を決めたあと、雑談になったら、「この人を最初見た時、インドネシア人と間違えてしまった。」と、説明し始めたので、フッと思いついて、「おじいさんがインドネシア人だから、当たり前だ。」と言ってやった。すると、大変びっくりして、どこの出身だ、などと尋ね出した。同宿者が、「イッツ、ジョーク。」と合の手を入れたので、三人で大笑いになった。以後、「お早う、インドネシアン。」と挨拶される破目になった。（広幡小）

①

岡崎再見 ㉕ 二七市

康生通りの北の八幡町通りを中心として、約三百米にわたり、毎月二と七の日に露天市が開かれ二七市と呼ばれている。

八幡通り商店街の発展を願う地元の人たちが、昭和三十年から始めたもので現在その数は百五十軒はあると聞く。野菜・果物・鮮魚と食料品関係が最も多く、植木・洋品・日用雑貨と種類は多い。露天商の人は、岡崎市内を中心として西尾・安城遠くは名古屋方面から、買物客は、近くの人は勿論福岡・岩津・矢作さらには豊田や額田の人も少なくないと関係者はいう。

わたしたちは、早朝の二七市にでかけてみた。小屋掛けをしている人、盛り付けしている人、早くも取り引きをしている人などなかなかの活気である。

「おじさん、この野菜どこでとれた?」「安城、ゆんべおそうまでかかって揃えただで新鮮だよ。」

「この魚はどこでとれた?」「吉良、今朝浜にあがったやつをろじさら買ってきただでまんだ生きとる。」

こんなやりとりの中に、小川で大根を洗っているおばあさんや、網の中で跳ねまわっている魚が目に浮かぶ。

土や潮の香りいっぱいの市。大きな袋を下げている人、乳母車を押すお年寄り。遠くに待たせた車で帰る人。皆満足そうな帰り道であった。

②

③

① 八幡町通りを中心とした二七市の全景。
② 今年最後の金魚売り。（弥富）
③ なかなか番の来ない味満点の大判焼。
④ たまねぎ、キャベツ、イチゴ等の野菜の苗。（碧南）
⑤ 安くて、丈夫な衣料品。（地元）
⑥ みずみずしい　とりたての野菜。（安城・碧南）
⑦ 浜で、網ごと買って来た魚介類。まだ生きている。（一色・形原・宮崎）
⑧ 福地産の鉢物。（西尾）
⑨ 刃物専門。（関）
⑩ 信州の畑で男衆がもいで、木箱につめ、夜行にのせた、もぎたてのリンゴ女衆が市に運び売っている。（畑買）

教育日々

夏の思い出

矢作南小　坂井　節

「雨がひどくなり、雷の心配がありますので、今年度は矢作地区大会を中止します。」

と、放送がありました。私はいっしゅん胸にひびが入ったような気がしました。（雨なんかどうだっていい。大会をやりたい。）そう思いました。今まで優勝のためにがんばってきて、延期してくれないなんて！もう声が出なくなりそうでした。力が抜けて、とぼとぼと教室へ帰りました。少しなみだがにじんできました。（雨のバカ!!）と、心で泣きました。なぜ、明日でいいからやってくれないかが不思議でした。一生このくやしさは忘れません。今日の雨は私のなみだなんだ!!

（由美子の日記より）

七月三十日、地区大会三連覇を目指して猛練習に耐えてきた我が水泳部員の前に立ちはだかった無情の雨。延期でなくて中止という突然の放送に、聞いている選手たちの顔が一瞬あおざめ、ぼう然とした表情を今でも忘れない。

翌日、きのうのことを忘れさせるために、一万メートルに挑戦させた。

今日は、すばらしい思い出ができました。それは、一日で一万百メートル泳いだことです。「今日の目標は一万メートル」と先生が言った時、実行してみたいと思いました。大変苦しかったが、本当に実行しました。水泳部のひとつの思い出ができました。

（由美子の日記より）

小学生に過酷と思われる練習を与えていいのかどうか、はっきりと答えられない。しかし、目標を持たせ、勇敢にチャレンジさせることも必要なことではないかと、私は考えている。

市の大会では、地区大会中止のうっぷんを晴らすがごとく、男子総合優勝、女子総合準優勝の成績を残すことができた。

「任せておけ！」

六ツ美中　松井伸子

「任せておいたら、何をやるかわからない。」

今までの私の性格として、いつも監視の目で生徒をみてきた。そして素直に従う生徒を良い生徒として扱い、その結果は自主性のない腑抜けな生徒をつくりあげることになる。学級経営はうまくいかず、毎年反省のくりかえしであった。

今年も三年生の担任となってまず考えたことは前述の反省であったが、なかなか思い切れないうちに月日が過ぎていった。

十月初めの研究発表を間近に控え、助言者、司会者を迎えて数学の授業をすることになった。その準備や気遣いのため、板書の計算ミスがたびたびあった。二、三の悪童が誤りをみつけて大喜びだ。例によって

「よく注意していてよろしい。」

と言って訂正するのであるが、そんな言い訳も通用しない再々の誤りに、

「近頃、ずっと寝てないからね。」

と、何気なく発した言葉。教室の空気が一変してしまった。

「先生、私達にできることはなに？あったら教えて下さい。」

私はびっくりした。

「いつもの通りでいい。元気に発言して頂だい。」

その後、生徒達は何をすればよいか、打ち合わせを持ったようである。研究授業の前日、

「明日は任せておけ！」

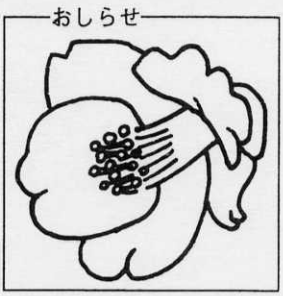
「今日はぐっすり寝てくれよ。」

乱暴な言葉の底に流れるやさしさを感じて嬉しかった。授業は成功とは言えなかったが無事終了した。

そう言えばいつの間にか任せることが多くなってきた。学級対抗のバレーボール大会や、水泳大会の時も、作戦に参加しようとすると「任せておけってば。」と言って連続優勝した。また、体育大会に向けても、早朝六時から練習している女子に、やさしく指導していた男子の姿はたのもしかった。

三連勝の祝賀会を提案するもの達。次の文化祭を盛りあげようと計画するもの達。任された生徒達は自らの力で活躍をはじめている。

「自分の言動には自分で責任を持たねば……。」という言葉に、何人の生徒が「任せておけ！」と、胸をはって応えてくれるだろうか。



福岡・羽佐田両氏と三団体に

第八回教育文化賞

岡崎市・岡崎市教育委員会・岡崎竜城ライオンズクラブは十一月一日、第八回岡崎市教育文化賞の受賞者に、次の二氏三団体を発表した。授賞式は十二月六日午後一時三十分から勤労会館で行われる。

【個人】

▽福岡寿一氏70歳（岡崎市明大寺町兎ケ入五の七三・新聞業）＝個人新聞「東海タイムズ」を二十四年間発行、その間に多くの書物を出版、貴重な資料を残す。

▽羽佐田ひさゑ氏55歳（岡崎市若松町中根五の八・岡崎市福祉課嘱託、家庭相談員）＝問題児童・生徒の家庭相談と指導、育成に献身的努力をはらい、多くの功績を残す。

【団体】

▽岡崎市現職教育委員会国語部（代表・細井浩平矢作北小校長）＝文集おかざき・風土記・岡崎子ども風土記・おかざきむかしばなし等の発行。

▽岡崎市小中学校環境緑化推進委員会（代表・神谷四土保福岡中校長）＝みどりの銀行の運営と学校、公共地の環境緑化につとめる。

▽松籟句会（代表・伊賀町東郷中、河口信一郎氏）＝句会を開き、句集「松籟」の発行、研究会を学校その他多くの職場で開催、地域文化の向上につとめる。

これで、第一回からの受賞者は個人十九氏、団体十八となる。

なお、授賞式では跡見学園短期大学教授、志賀富士男氏・国際放映プロデューサー、高林公毅氏・通産省石油部長、志賀学氏等の記念講演がある。

全日本健康優良校日本一

岡崎小晴れの受賞

全日本健康優良校大規模校の部で、全国特別優秀校に輝いた岡崎小は、十一月三日、朝日新聞東京本社で表彰を受けた。

表彰式には杉田校長のほか、児童代表として前期児童会長近藤聖子さん、後期児童会長の青木孝明君、それにPTA会長の高木正人氏の四人が出席した。

このあと一行は、他の表彰者と皇居へ向かい、天皇、皇后両陛下にお目にかかり、おことばをいただいた。

■自作ビデオ教材全国入選

視聴覚ライブラリー自作委員会製作の小学校社会科三年用ビデオ教材二本が、全国自作視聴覚教材コンクールで入選した。入賞した作品は次の通り。

・「夏すずしい、駒ケ原」14分

・「島のくらし」15分

■岡崎のハーモニー

県芸術選奨受賞記念、第八回岡崎のハーモニーは、去る十一月二十三日「未来に夢を」をテーマに盛大に行われた。

■県健康優良児童表彰

去る十一月五日、県医師会館での愛知県学校保健研究大会の席上で、県健康優良児童生徒の表彰が行われた。本市の受賞児童は次のとおり。

入選＝羽根小、近藤要生

【寄贈刊行物・資料等】

◇**岡崎市文化財図録　第三集**
岡崎市教育委員会
B5判　八三頁

◇**藤華　第三号　岡崎文化協会**
A5判　二四六頁

◇**現場学習指導計画**
奥殿小学校B5判　九八頁

■十二月の研究発表校

・三島小12／9（火）「視聴覚機器を活用した学習指導―学習意欲の向上をめざして―」

・矢西小12／12（金）「思いやりのある矢西っ子の育成―異質集団活動を通して―」

第七回冬期研修会近づく

明日の教育を考える第七回冬期研修会は、十二月二十五日から三日間岡崎市少年自然の家で行われる。

◎講演

12／25一道の微光を求めて＝海星女子大教授、森信三氏
仏教的宗教教育＝大樹寺住職、藤吉滋海氏

12／26女教師と職場＝文教大教育学部講師、下田澄子氏
狸と日本民族＝前愛知教育大学長、井上友治氏
生き甲斐・人間と教育＝人間世代研究所長、竹下肥潤氏
女子教育について＝お茶の水女子大教授、外山滋比古氏

12／27人生随想＝随筆誌「燕雀」主宰、杉田有窓子氏

◎分科会　21／26

①教師の生き甲斐を考える―助言者、竹下肥潤、井上友治両氏

②子どもの豊かな心を育てる―助言者、堀内守（名大助教授）綱沢昌永両氏

③子どものことばを育てる―助言者、加藤明康氏（CBC）

④子どもの悩みにこたえる―助言者、伊奈彦定（教育サービスセンター）、田中茂男両氏

⑤子どもの体力を伸ばす―助言者、杉浦寿康（小児科医）、天野義裕（愛教大助教授）両氏

⑥これからの女子教育を考える―助言者、外山滋比古氏

青年会相撲番付額

所在地－岡崎市井田町

宅地造成され、昔の面影をしのぶものが見当らないほど、近代的な家が立ち並んでしまった葵中学校のあたり。昔の面影を残すかのように、井田保育園と木立で境を接して持法院がある。そこに、青年会相撲の番付額が奉納されている。

昭和二年九月一日の日付があるこの番付額は、大関・関脇・小結・前頭・行司などと大相撲と変わらぬ立派なもので、勧進元は「井田青年会」となっている。

今でも、神社の祭礼の時などに子供の奉納相撲が行われるがそのころ相撲はもっと盛んであった。井田の青年会では、蒲郡・三谷あたりまで遠征して、相撲を取ったそうである。また、今の子供会のソフトやバレーのように、子供達に相撲のけい古をつけ、全市的な大会にも出場させたそうである。

そういえば、岡崎出身の相撲取りもいる。

●カット　福岡中　山本健治

この本を

○北京三十五年（上・下）　山本　市朗
岩波書店　各 380 円

○旅は道づれツタンカーメン　松山　善三　高峰　秀子
潮出版社　1,400円

○日本の子どもたち　生活と意識　ＮＨＫ世論調査シリーズ
日本放送出版協会　2,000円

○泥流地帯　三浦　綾子
新潮社　900円

○手と目と声と　灰谷健次郎
理論社　1,200円

○ローヌ河歴史紀行　笹本　駿二
岩波書店　380円

○話の散歩道　楠本　憲吉
広論社　1,450円

○衣の社会学　加藤　秀俊
文芸春秋　1,000円

○スペイン子連れ留学　小西　章子
鎌倉書房　950円

○観客席から　遠藤　周作
番町書房　1,300円

オアシス

大晦日。楽しかったこと、つらかったこと、さまざまな思いを秘めて今年も終わる。紅白歌合戦の終わるころ、静まりかえった闇の中を遠く近く除夜の鐘が。老いも若きも新しい年を迎える。

「運命は内からも働く」とゲーテはいう。夢のある希望のもてる楽しい年としたいと思う。

「試験とテストとは違う。試験は入学試験や入社試験のように落とすためのもの。テストは今までに学んだことがどれくらいわかったかテストするもの。」とか。こんなことを言って、「ちょうどクラブの大会と練習試合のようなものだね。」と答えて、試験のためのテストを進んで受けてくれないものかなあ。

秋を飛び越えて冬。と思わせた十一月初め、職員室にはストーブが入った。それを編集会が遅くなってはと、K先生がわざわざ運んで下さった。「もうはやストーブ出てるの。」と、若い声。「奥殿も出てるよ。二、三度違うよ。」岡崎は広い。山の上のわが校は木造で、隙間風が吹き込むし、神経過敏な輩も多いとの事。

スラスラと、文章が書けたらなあ。原稿用紙をながめながら、いつも思うことである。そのくせ子供には、「さあはやく書け。」

矛盾しているなあ。

作文といえば、卒業文集を書かせなければ。テーマは、締切りは。また、「はやく書け。」になりそうだ。